



1 発音指導のモデル

1-1 NS (Native Speaker) 型

- 小学校学習指導要領 (外国語)
第3 (5) …授業の実施に当たっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、…
- 中学校学習指導要領 (外国語)
第2 3 (1) キ …ネイティブ・スピーカーなどの協力を得たりなどすること。
- 高等学校学習指導要領 (英語)
第3款 2 (4) …また、ネイティブ・スピーカーの協力を得るなどして、…
- 土屋、広野 (2004) p.49
中学校学習指導要領には、発音に関して、「現代の標準的な発音」とだけ書いてある。したがって、日本人がモデルとする発音としては、RP または北アメリカ英語のいずれかに準拠するのが良いということになる。

1-2 EIL (English as an International Language) 型

- Kachru (Cited in Jenkins (2003) p.63)
The culture-bound localized strategies of, for example, politeness, persuasion and phatic communion transcended in English are more effective and culturally significant than are the 'native' strategies for interaction.
- 田中、田中 (2001) p.24
英語でコミュニケーションをはかるからといって、完ぺきにネイティブスピーカーと同じ英語を話す必要はない。なまりのある発音や特徴のある文法を使って英語を話したとしても、相手に理解できる(intelligible)英語であれば、十分にコミュニケーションは可能である。自分のアイデンティティを表す英語を使うことで、国際人として歩いて行ってほしい。
- McKay (2001) p.126
… many bilingual users of English do not need or want to acquire native-like competence. …
EIL belongs to its users, there is no reason why some speakers should provide standards for others.

1-3 Japalish 型

- 渡辺武達 (1989) p.58

日本人としての主体の上に立って、存立基(アイデンティティ)を失わずに英語学習をおこなう、…日本の学校英語教育の中で、どうジャパリッシュの教育方法をとったら効果的か、などについて、世界の言語史を踏まえながら、述べていきたい。

- 鈴木 (2001) p.102

イングリックとは、ひとまず英語を言語素材として、日本人が言いたいこと、自分のことを言うための手段であって、これは英語を元々使う人々(ネイティブ・スピーカー)と、それを学習して使う人々(非英語国民)との中間に位置する、妥協の産物と考えてください。

- 田中、田中 (2001) p.24

アメリカ人はアメリカ英語、イギリス人はイギリス英語、シンガポール人はシンガポール英語、インド人はインド英語、日本人は日本語なまりの英語というように、話し手のアイデンティティを生かした英語で意志伝達が明瞭にできれば、むしろ聞き手により印象を与えることができるだろう。

2 学生の意識 (調査紙A)

2-1 回答者、全体像

表1 回答者の内訳

	英語を専門とする学部・学科	英語を専門としない学部・学科
私立 A 大学	60 人 356.4 (SD=110.9, N=51)	119 人
私立 B 大学	—	101 人 376.5 (SD=86.7, N=89)
公立 C 大学	134 人 684.6 (SD=114.4, N=44)	—
公立 D 高校	47 人	—

(カッコ内) : テストスコアが得られた回答者の TOEIC 換算スコア

表2 英語を話す能力に関するアンケート(全体像)

2007 年冬

	非常に思 う	そう思 う	どちらとも いえない	そう思 わない	全く思 わない
1 自分の英語の発音はネイティブに近いと思いますか?	7	21	68	179	185
2 ネイティブの発音に近づけたいと思いますか?	198	190	47	18	8
*3 自分の英語の発音が通じずに困った経験はありますか?	29	88	199	105	36
4 中学高校で発音の指導が十分されたと思いますか?	6	51	114	160	130
5 日本人は日本人としての特徴のある英語を話すべきだと思いますか?	14	44	157	185	61

*3 の選択肢 : 「非常によくある」「よくある」「時々ある」「めったにない」「全くない」

2-2 結果、考察、研究課題

2-2-1 表3 自分の英語の発音はネイティブに近いと思いますか？

結果	考察	キーワード
79%の学生が NS 発音に近いと思わない。	<ul style="list-style-type: none"> 発音指導が不十分？(表 2.4 参照) モデルとなる NS の不在？ NS 発音を習得基準にすることに無理がある？ 	Opportunity Opportunity Standard
TOEIC 換算スコアとの間に弱い正の相関。	<ul style="list-style-type: none"> 英語力が高い学生ほど発音に自信がある or 発音に自信がある学生ほど英語力が高い？ 	Motivation
英語/非英語専攻グループ間で有意差なし。	<ul style="list-style-type: none"> 英語専攻の学生は発音自己評価の基準が高い？ 	Standard

2-2-2 表4 ネイティブの発音に近づけたいと思いますか？

結果	考察	キーワード
84%の学生が NS 発音に近づけたい。	<ul style="list-style-type: none"> 理由を探り、英語学習への動機付けにつなげたい。 	Motivation
2-2-1 との間に弱い正の相関。	<ul style="list-style-type: none"> 発音に自信がある学生ほど高い発音習得意欲 or 発音習得意欲が高い学生ほど上達している？ 	Motivation
2-2-3 との間に弱い正の相関。	<ul style="list-style-type: none"> 発音習得意欲が高い学生ほど困難も経験？ or 困難経験が豊富なほど発音習得意欲が高い*？ 	Motivation Opportunity
Japalish 意識との間に <u>弱い負</u> の相関。	<ul style="list-style-type: none"> NS / Japalish 以外の発音モデルが存在する？ 	Standard
英語/非英語専攻グループ間で有意差あり。(表 5 参照)	<ul style="list-style-type: none"> 非英語専攻学生 4 人に 1 人は NS 発音を目標にしていない。 	Standard Motivation

*Jenkins (2000)

表5 ネイティブの発音に近づけたいと思いますか？(専攻グループ別)

	非常に思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全く思わない
英語専攻 (N=241)	62%	33%	4%	2%	0%
非英語専攻 (N=220)	22%	50%	17%	6%	4%

2-2-3 表6 自分の英語の発音が通じずに困った経験はありますか？

結果	考察	キーワード
31%の学生が全く/めったに発音上の困難を経験していない。	<ul style="list-style-type: none"> NS 発音自己評価・TOEIC 換算スコア共に有意な相関がないので、問題がないわけではない。 日本国内ではカタカナ発音でも通じる？ 英語で会話する機会自体が乏しい？ 	Opportunity
英語/非英語専攻グループ間で有意差あり。(表 6 参照)	<ul style="list-style-type: none"> 非英語専攻学生は特に英語で会話する機会が少ない？ 	Opportunity

表7 自分の英語の発音が通じずに困った経験はありますか？(専攻グループ別)

	非常によくある	よくある	時々ある	めったにない	全くない
英語専攻(N=239)	5%	26%	52%	15%	1%
非英語専攻(N=218)	8%	11%	34%	31%	16%

3 学生の意識 (調査紙B)

3-1 回答者、方法

表8 回答者の内訳

	(予備調査)	(本調査)
	英語を専門とする学部・学科	英語を専門としない学部・学科
私立B大学	—	283人
公立D高校	46人	—

表9 英語 Speaking、Listening についてのアンケート

2008年春

(1) あなたはどのような発音で英語を話したいですか。最も当てはまるものを下から1つ選んで数字で答えてください。

① ネイティブスピーカーと同じような発音で英語を話せるようになりたい。

② 言いたいことが相手に伝わるのであれば、発音にはこだわらない。 回答: _____

③ 英語発音の中に自分の母語である日本語の特徴を残しておきたい。 _____

(2) (1)の答えを選んだ理由を思いついた順に3つまで書いてください。

(3) 現在あなたが日常英語で話をする機会を下の3つを合わせて100%とすると、何%ぐらいの比率になりますか。

A. 英語を母語とする人を相手に話す機会。	_____ %	} 100 %
B. 英語、日本語以外の言語を母語とする人を相手に話す機会。	_____ %	
C. 日本語を母語とする人を相手に話す機会。	_____ %	

3-2 結果、考察

表10 結果

キーワード	調査項目	選択肢	結果		
Standard	(1)	① NS型モデル	103		
		② EIL型モデル	170		
		③ Japalish型モデル	10		
Motivation	(2)	自由記述	表11参照		
Opportunity	(3)		0-33%	34-66%	67-100%
		A. 対NS環境	269	10	4
		B. EIL環境	276	6	1
		C. Japalish環境	17	16	250

表 1 1 Motivation 分類

分類の基準	分類	NS	EIL	Japalish	total
相手・話す・伝える・会話・意思疎通	Communication	32	100	1	133
カッコいい・きれい・正しい	Prestige	41	1		42
現状・苦手・無理・難しい・自信ない	Learnability		33		33
仕事・将来・旅行・映画・歌	Instrumental	25	6		31
使わない・困らない・こだわらない	No needs		14		14
自分・日本・人のマネしたくない	Identity		4	4	8
カタカナ英語・恥ずかしい	anti-Japalish	3			3
地方で差・冷たい感じ	anti-NS		1	1	2
	Others		3	1	4

3-2-1 NS 型モデル

- 全体の 36%が NS 型モデルを選択した。調査紙 A の英語専攻グループ別の調査(表 5)の結果を考えると、英語専攻の学生ではより高い比率になることが予想される。
- NS モデルを選択した学生があげた理由は、「Prestige」「Communication」「Instrumental」に分類されるものが大半を占めた。このことから学生が NS 発音を「権威あるもの」「意思疎通のために必要なもの」「仕事や趣味に役立つもの」と考えていることがわかる。
- 95%の学生が「英語を母語とする人を相手に話す機会(表 9-3 A)」に関する質問に対して 0-33%と回答した。NS モデルを日本の教育現場で採用することの問題点として、実際に NS 相手に会話をする機会が乏しいということがあげられる。

3-2-2 EIL 型モデル

- 60%の学生が EIL 型モデルを選択した。NS 型/Japalish 型のみについて質問した調査紙 A では大半の学生が NS 型を目指しているかのように見えたが、学生の意識により近い動機付けのためには EIL 型も選択肢として有効なことが明らかになった。
- EIL モデルを選択した学生があげた理由は、「Communication」に分類されるものが多かった。「発音の NS らしさ」よりも「意思伝達」を priority とする傾向が見られる。また、20%が「Learnability」を理由にあげたことは、NS 発音は習得できないから EIL をめざすという「諦め」の表れとも受け止められる。
- 大半の学生は EIL 環境での会話を経験する機会を持たないことが分かった。特に EIL 習得のためには、母語が異なる話者間で自分の発音の intelligibility を確認することが必要とされているため(Jenkins 2000)、英語教育現場で EIL 型モデルを採用するためにはいかにして環境を整えるかが重要な課題となる。

3-2-3 Japalish 型モデル

- Japalish 型モデルを選択した学生は少数であった。調査紙 B は非英語専攻の学生を対象にしたためカタカナ発音の学生が多く含まれるが、自分のカタカナ発音に満足しているわけではない、ということが明らかになった。

- Japalish を奨励する研究の中には「anti-NS」と受け止められる表現が見られるが、「NS のマネをしたくないから」Japalish を選択したという回答はわずか1人だった。
- 学生が英語で話をする機会についての質問で、日本人同士での会話が大半を占めていることは、英語使用が教室内での練習に限定されていることの表れと考えられる。実際に英語を使わなければ意思伝達ができない、という環境にない日本での発音教育のあり方を考える必要がある。

参考文献

- Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an International Language*. Oxford.
- Jenkins, J. (2003). *World Englishes: A resource book for students*. Routledge.
- McKay, S. L. (2002). *Teaching English as an International Language*. Oxford.
- Murata, J. (2008). What kind of English – for Japanese learners of English in the age of English as a Lingua Franca? 『神戸外大論叢』第 59 巻.
- Snow, R., Jackson, D III. *Assessment of Conative Constructs for Educational Research and Evaluation: A Catalogue*
- 鈴木孝夫 (2001). 『英語はいらない! ?』 PHP 研究所
- 田中克彦(2002).『ことばと国家』岩波新書.
- 田中春美、田中幸子 (2001). 『社会言語学への招待』 ミネルヴァ書房
- 土屋澄男、広野威志 (2004). 『新英語科教育法入門』 研究社
- 中西のりこ(2008). 「英語発音学習に対する学生の意欲と動機付け」『コミュニケーション研究叢書』第6集, 47-57.
- 文部科学省 「学習指導要領」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youryou/main4_a2.htm
- 渡辺武達 (1989). 『ジャパリッシュのすすめ - 日本人の国際英語』 朝日選書